

アイヌ民族:歴史と現在

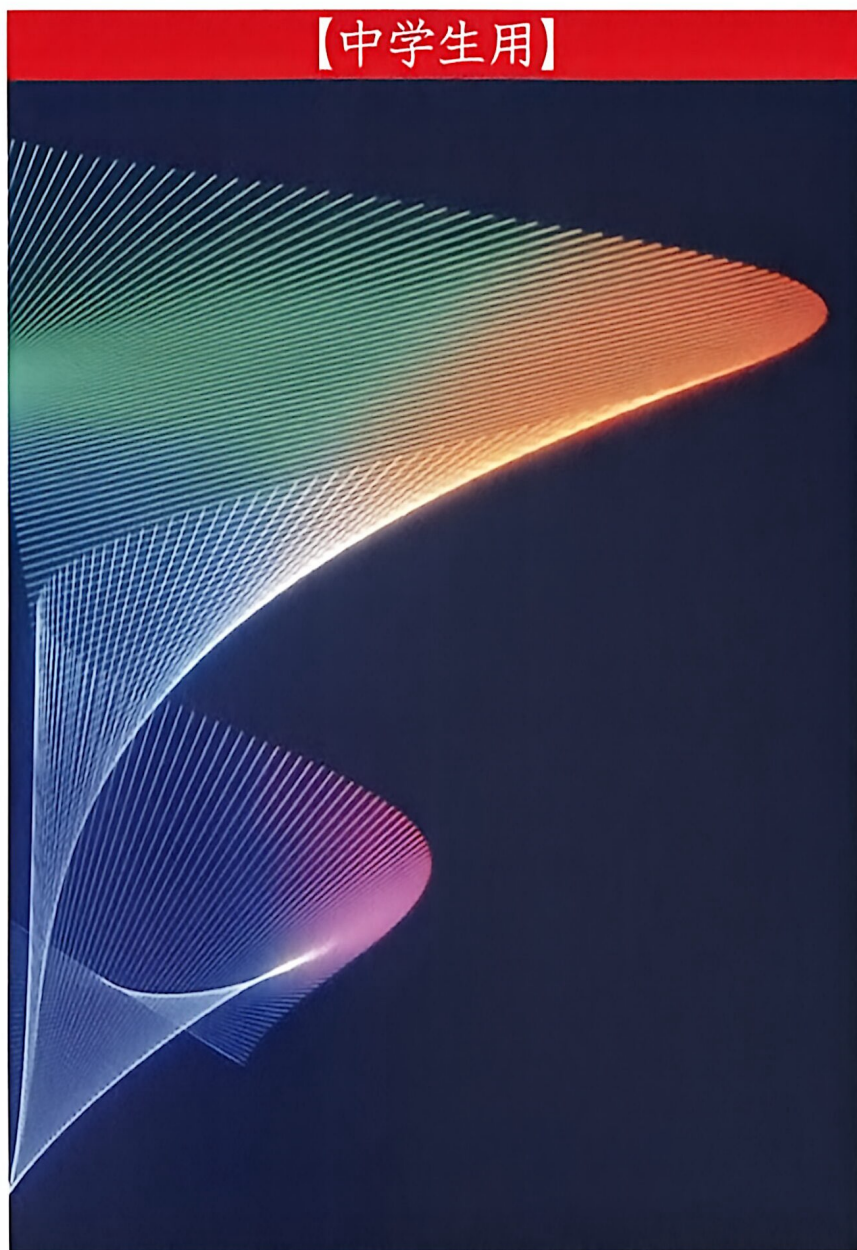
—未来を共に生きるために—

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌ民族:歴史と現在

—未来を共に生きるために—

【中学生用】



財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

はじめに

この本は、アイヌ民族について中学生のみなさんに学んでもらうために作られました。

今の日本の社会科の教科書に書いてあることは、ほとんどが **和人*** の社会や文化についてです。しかし、日本には和人だけが暮らしてきたのではありません。アイヌ民族も、昔から日本列島に住んできました。そこで、アイヌの社会や文化の歴史について教科書に書いてあることを補うのが、この本の役目です。

そして今、日本にはさまざまな民族が暮らしています。日本中でこの本を読んでいる中学生のなかにも、さまざまな民族がいます。アイヌ民族も和人も含め、みんながお互いのことをよく知ったうえで、これからの社会を作っていかなければなりません。

人によっては、小学生のときに同じような本で勉強した人がいるかもしれませんが。しかしそのときと今とでは、理解の度合いに違いがあるはずです。どうかこの本を大切に、何度も読み直してみてください。

*「和人」は、今の日本のなかで一番人数の多い人たちを、アイヌ民族と並べて呼ぶときの呼び名です。同じ読みかたで「倭人」という漢字もあります。これは昔の中国の人が日本に住む人のことを指して呼んだ名前です。

I. 土器を使い始める前の時代

最近あちこちで、大昔の人たちが使った石器が発見されている。それで、日本列島には、数万年前から人が住んでいたことがわかってきた。北海道でも、同じくらいの古さの石器が発見されている。

*皮なめし

動物の皮から毛や脂をとりのぞいてきれいにし、柔らかくすること。

2万年くらい前には、**皮なめし***の道具や削り具として、石を割っただけの薄い石器を使っていた。

1万8千年くらい前の地球は、氷河期の中でも寒さがピークをむかえた時期だった。蒸発した海水が雪になって降り、

陸上に積もった。雪になって海水が減った分、陸地の面積は増えた。約7万年から1万年前まで、北海道とサハリン（樺太）・アジア大陸の間はずっと陸続きだった。人々は、そこを当たり前の陸地として自由に行き来していたようだ。

このころ、細石刃という小さな石器が作られていた。厚さ1～2mm、長さは数mmから数cmの小さなカミソリの刃のようなもので、これを動物の骨や角で作った槍先や銚先に埋め込んで使ったようだ。槍先の材料である動物の骨は身近なところで手に入れられるし、

埋め込んだ細石刃がこわれたら、刃を付け替えるだけでいいので、ずいぶん便利になった。この石器は「組み合わせ道具」と呼ばれる。

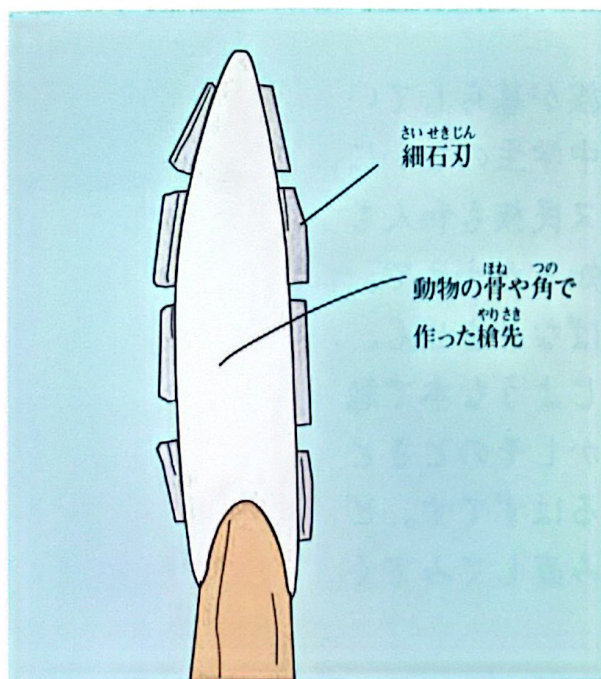


図 I-1: 細石刃
槍先の横側の溝に細石刃が埋め込まれています。

1万年ほど前になると気候は温暖化し、マンモスなどの動物のうち、あるものは北へ^{しど}戻り、あるものは死滅^{しめつ}し、あるものは北海道に取り残された。細石刃を使った人々のほとんどは、現在北海道で見ることのできるクマやシカ、サケ・マスをとって暮らしていたようだ。

そのころの人々は、^{たてあなじゅうきょ}竪穴住居^{*}に住んでいただろうと思われる。しかし、住居^{あて}の跡が見分けにくくなっているのは、はっきりしたことはわからない。木や骨、皮で作られたものは、長い年月の間に風化・酸化したり、動物や微生物^{びせいぶつ}に食い荒らされたりしてしまうため、石でできたものしか残らない。木や骨が残るためには、水によって微生物の繁殖^{はんしよく}がおさえられる湿地帯などに、すぐさま埋^うもれる必要がある。

墓^{はっくつ}も、完全なかたちで発掘するのは難しいが、道南^{しりうちゅう}の知内町や千歳市などで発見されている。琥珀^{こはく}の玉などが^{ベンガラ}ベンガラ^{*}という赤い粉とともに出土した。ベンガラは古くから、化粧のように顔^{かほ}に塗^ぬるだけでなく、墓^いでは遺体をおおうように振りかけてあることが多い。

^{たてあなじゅうきょ} *竪穴住居

地面を掘り下げて作った家のこと。5～6人くらいの家族が住んでいたようだ。家の中央には「いろり」があった。

^{ベンガラ} *ベンガラ

鉄分を含んだ赤い鉱石（赤鉄鉱）を焼いて粉末にしたもの。

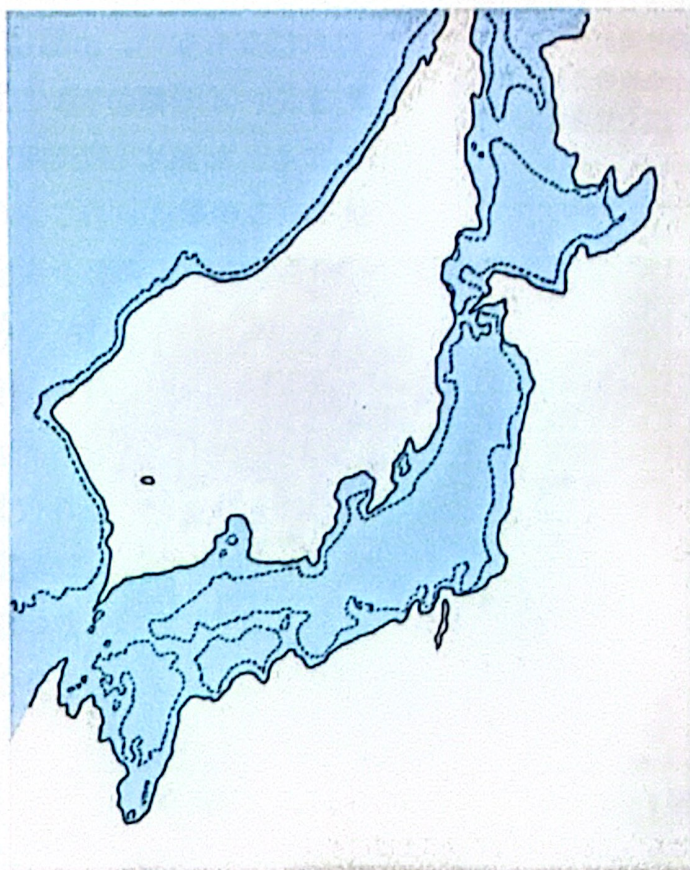


図 I—2: 約 2 万年前の日本列島
海面を今より 140m 低くしてみた図です。

Ⅱ. 縄文時代の文化

〈土器作りの開始〉

日本列島では、今から1万2千年ほど前に、九州北部で土器作りが始まった。これ以後の時代を縄文時代という。

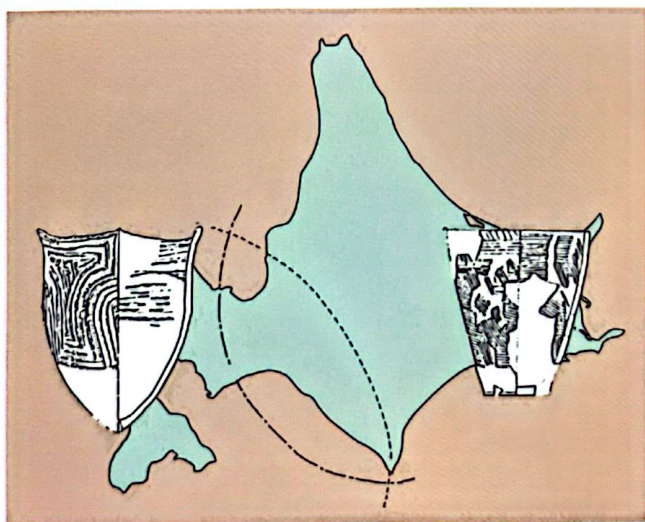
縄文時代の人たちという、狩りをする姿をすぐに想像してしまうが、実際には動物の肉よりも、自然に生えているドングリなどの植物をたくさん食べていた。特に、ナラの木のドングリは、シカやクマの約3倍、サケの2倍以上のエネルギーになる。

*落葉広葉樹林

ナラの木やクヌギ、ブナなど、冬の間、葉を落としてしまう樹木の仲間が多く生えている森林のこと。東日本に広く分布している。

北海道を含む東日本のドングリは、落葉広葉樹林*にあるクヌギやナラの実である。これらのドングリには有毒なタンニンが含まれている。毒を抜くためには湯をわかさなければならぬ。土器はそのために便利な道具だった。

また、イモ類のデンプンを消化しやすいものに変えるためにも、加熱する必要があり、そのためにも土器が使われた。



図Ⅱ—1:土器の形にあらわれる道南と道東の違い
どちらも縄文時代早期の土器です。

〈北海道の土器〉

北海道の土器は、道南と道東では形が違う。道南の土器は底がとがっているのに対し、道東の土器は平底である。土器と一緒に出土する石器の組み合わせも異なっている。

道南の土器は本州の東北地方の土器と似ている。

道東の土器には本州と違う点がある。たとえば、道東では細石刃文化

の時期に土器が作られ始めたが、当時、落葉広葉樹林が広がっていない地域が多く、ドングリを食べていたようすがない。石皿のようなドングリを粉にするための道具もほと

細石刃文化
6 ページ参照

んど見つかっていない。道東の土器は、本州からドングリとの関係で伝わってきたのではないのかもしれない。

〈北方からの新しい文化〉

縄文時代の初め頃、道東に^{せきじんぞく}石刃鉄文化* という新しい文化が広がった時期があった。アジア大陸の北の方で生まれた文化が伝わったと考えられる。

なおこの頃には、北海道とアジア大陸の間は海になっていた。この文化の遺跡からは、軽石でできたクマの頭の彫り物などが発見されている。

^{ぎょろう}漁労を中心とした生活を送りながらも、クマの彫り物を残しているという点は、後のオホーツク文化によく似ている。

〈様々な文化の流れ〉

北海道の縄文文化は本州の文化ともつながっている。^{あお}青森県の^{もりけん}三内丸山遺跡^{さんないまるやま いせき}が発見され、縄文時代のイメージは大きく変わった。直径1mのクリの木で作った建物の跡をはじめ、^{うるし}漆やヒスイの加工技術、北海道から新潟^{にいがた}までを結ぶヒスイ・^{こくようせき}黒曜石・アスファルト・琥珀^{こはく}などの交易網、いろいろな植物を育てたようすなどから、縄文時代の豊かさが伝わってくる。

^{ちとせし}千歳市のキウス遺跡でも同じように、大きな柱を立てた遺跡が発見された。このような遺跡は、石川県金沢市や滋賀^{しがけん}県でも見つかっており、文化のつながりが感じられる。

また、道東では、イルカの頭の骨をきれいに並べて何段にも積み重ね、その上にベンガラがまかれているのが発見された。トドの墓にベンガラをかけたものもみつまっている。これはイルカやトドの魂^{たましい}を神の国に送る儀式^{ぎしき}の跡ではないかと考えられる。

*石刃鉄文化

道東の7～8千年前くらい前の遺跡^{いせき}から、石刃^{せきじん}（ブレード）という石器に簡単に手を加えて作られた特殊な鉄^{てつ}（矢の先端^{せんたん}）が発見されることがよくある。普通、縄文時代の遺跡から、このような石の鉄は出土しない。そのため、この文化を特別に「石刃鉄文化」と呼ぶ。

👉 オホーツク文化
15ページ参照

〈縄文時代からの文化のつながり〉

湿地帯からは、水の中にパックされた多くの木製品が発見されている。道具の他にも、櫛や弓、弦楽器の本体と考えられるもの、赤い糸玉などが出土している。舟の形をした木製の容器には、北海道内のずっと後の時代の遺跡から発見された容器とそっくりなものがあり、縄文文化が受け継がれていることがわかる。また、シラカバの木の皮の容器は、北東アジアに住むいろいろな民族に共通してみられる。



写真Ⅱ-1:土器につけられた動物のかたち

上:クマ

下:フクロウ

どちらも千歳の美々4遺跡
から出土したものです。

クマの頭の形をした軽石製の彫り物をはじめ、クマの形をかたどった製品は多い。その他にも、土で作ったシャチ、フクロウの形をした把手のある土器など、いろいろな動物の形をしたモノが発見されている。これらには後の時代のアイヌ文化との共通点が見られる。アイヌ文化の始まりを考えると、まず縄文文化から考える必要がある。

Ⅲ. 7～13世紀の政治・社会—東北地方の蝦夷—

〈古代国家にとっての異民族の意味〉

このころの日本の国の指導者たちは、日本も中国の皇帝を守る国の一つだとして遣隋使や遣唐使を送りながら、自分たちもまた異民族を従えた国だと考えていた。そして自分たちの支配地域の北側に住む人々を異民族だと考え、「蝦夷」「夷」などと書き、また「エミシ」「エビス」「エゾ」などと呼んでいた。このころの蝦夷についての記録は、そうした意味を持って書かれている。

〈東北地方北部と古代国家〉

7世紀なかごろの大和政権の勢力範囲の北限は今の宮城県南端から新潟県中部までだった。8世紀になると、朝廷の勢力が今の秋田県から宮城県にまで広がった。8世紀の末には、蝦夷のなかから任命された役人である伊治些麻呂が朝廷に戦いを起こした。これに対して送られた大軍を、アテルイを指導者とする蝦夷の軍が破った。その後アテルイは、朝廷から征夷大將軍に任命された坂上田村麻呂に敗れた。

9世紀なかごろには災害やききんが相次いで、征服された蝦夷の子孫が戦いを起こしたりした。

10世紀に、今の岩手県の一部を安倍氏が支配するようになった。11世紀には清原氏が勢力を持った。さらにそのあと、今の岩手県にある平泉を中心に藤原氏が栄えた。安倍氏、清原氏、藤原氏は現地の有力者で、蝦夷の子孫だと考えられていた。

〈蝦夷の社会〉

7世紀には蝦夷の村の規模が拡大し、村の数も増えた。

指導者たちは朝廷から位を得たりして、現地で力を強めようとした。国家に対して不満がたかまれば容易に戦いをおこせし、蝦夷の内部の対立もあった。

生活の手段は農耕、狩猟・漁労・採集、牧畜などさまざまであった。8世紀ころには東北北部にも農耕を行う村が広がり、アワやヒエなどだけではなく稲作も行われ、鉄製農具も広く用いられた。毛皮や昆布、馬などの交易も行われ、交易の相手には北海道も含まれていた。

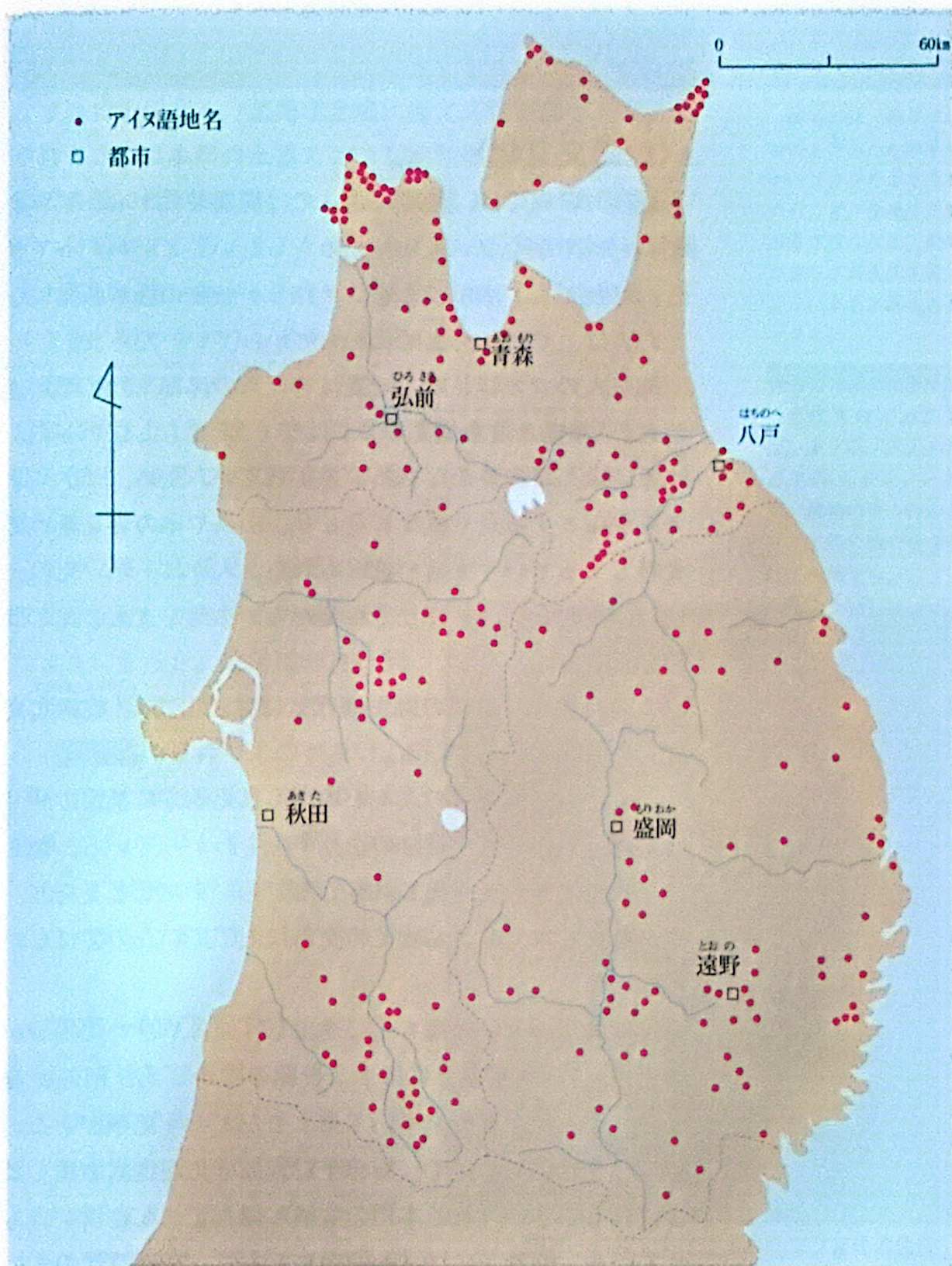
〈鎌倉時代のエソ〉

鎌倉幕府ができると、津軽地方出身の安藤氏が代官に任命された。鎌倉時代のなかごろに安藤氏が殺されたときの記録に出てくるのはアイヌの人たちだと考えられている。

〈まとめ〉

当時の制度や社会のようすからは、記録に書かれている蝦夷がアイヌ民族であるかどうかを知ることがまだできない。このころの和人による記録のなかには、実際のアイヌ民族の活動が含まれている。しかし、和人が自分たちで勝手に作り出した異民族のイメージによるものも含まれている。

8世紀には東北地方にアイヌ語でつけられた地名がある。このことは蝦夷とアイヌ民族とを結びつける有力な証拠だと考えられている。



図Ⅲ—1:東北3県（青森県、秋田県、岩手県）にあるアイヌ語地名

IV. 1～13世紀の文化

〈続縄文文化〉

最近の研究では、地域によっては縄文時代から、アワやヒエだけでなくコメも作り始めたらしいことがわかってきた。けれども、水田によるコメ作りが社会の経済基盤になったのは、やはり弥生時代からといっていいだろう。

弥生人のコメ作りは、一度は青森県の津軽平野まで到達したが、津軽海峡を越えることはなく、定着もしなかった。北海道は、特に豊かな自然に恵まれていたため、サケやマスを中心とする魚や獣などをとり、山菜や木の実を集めて食料とするという生活が続けられた。人々は、寒い北の土地には不向きなコメ作りで自分たちの生活を支えようとはしなかった。

この時代を、本州の弥生時代とは区別して、「続縄文文化」の時代とよんでいる。

このころ、北海道の人々が本州の東北地方に集団で移り住んだらしいことが遺跡のようすからわかっている。彼らは、東北地方の農耕民と共存しながら、クマなどを狩り、その毛皮を本州産の品物との交易にあてていたのではないだろうか。

逆に本州の大和政権も北に進出し、交易や争いの機会が増えた。『日本書紀』には、7世紀のなかごろ、阿部比羅夫という人物が軍船を率いて北上したという記事がある。

8～9世紀にかけて、石狩平野には「北海道式古墳」とよばれる小さいけれど本州の古墳と似たような古墳が作られている。副葬品には「和同開珎」など、奈良時代のものが含まれている。このような本州からの影響で、続縄文文化は大きく変わっていった。

〈擦文文化〉

9～13世紀ごろ、北海道全域に擦文文化が広がった。形や作り方には本州の土器とのつながりを感じられるが、土器の表面には、「擦文」という名前のもとになった**刷毛目***がつけられている。また、刻まれた線の独特の模様は統縄文土器から受け継がれたものであり、後の江戸時代のアイヌ文化とのつながりも考えられる。

擦文時代の人々は、サケ・マスなどがあがってくる川の河口に大きな村を作った。周辺には数棟すうとうずつの小さな村が散らばり、季節ごとの労働や交易によって住み分けていたようだ。

このころになると、石器は使われなくなり、次第たいだいに鉄の道具を使うようになった。住居は四角い床の竪穴住居たてあなじゆうきょで、東や南の壁の一部に「**かまど**」*を持つものが多い。

「かまど」とは別に、床の中央に簡単な「いろり」を持つ例も少なくない。穀物や野菜が栽培きようばいされるなど、暮らし方も変化してきた。

〈オホーツク文化〉

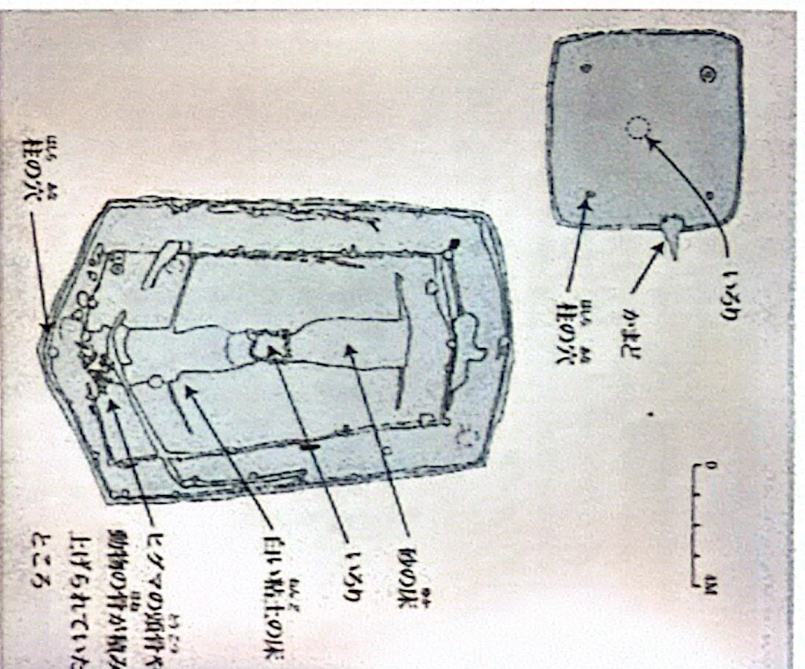
擦文文化とほぼ同じころ、オホーツク海の沿岸には、サハリンサハリン（樺太）や北東アジアの影響が強いオホーツク文化が広がっていた。オホーツク文化は、石器や石製品のほかに鉄器や青銅器せいどうきを持っていた。なかでも**青銅***の帯金具おびかなぐはシベリアのアムール川流域でも出土しており、両地域の強い結びつきを物語っている。動物の骨や角から作った女神像

*刷毛目

刷毛とは、のりや漆などを塗るための柔らかいブライのようなののこと。普通は動物の毛で作られる。刷毛で土などの表面を掃くようにすると刷毛目ができる。

*かまど

煮炊きのための施設。土・石・れんがなどで作られる。一般に、前側に焚き口があり、上部に竈や釜をかけて加熱する。



図N-1: 擦文文化とオホーツク文化の住居
上: 擦文文化の住居 下: オホーツク文化の住居

*青銅

銅と錫をとかして混ぜて作った金属。ブロンズともいう。

やクワ・シヤチの彫り物には見事なものが多い。船のミニチュアからは盛んだった海上交通のようすもうかがえる。五角形や六角形の床を持つ大きな竪穴住居の奥には、クワの頭の骨などがきちんと積み上げられており、なにかの儀式が行われたことが想像される。網走のモヨロ貝塚がオホーツク文化の遺跡としてはもっとも有名である。

この文化は、やがて擦文文化がオホーツク海沿岸まで広がる中で力が弱まり、消えていった。

〈土器文化の終わり〉

12～13世紀になり、交易がますますさかんになるにつれ、本州からの品物を手に入れるために、交換物としての獣や魚をとることが重要な仕事になっていった。人々は農耕を捨て、豊富なサケやマスを求めて河口に大集落を作った。

***平地式の住居**
竪穴住居とは違って、床になる部分の地面を掘り下げずに建てた住居

「かまど」は不要になり、竪穴住居は、床の中央に「いろり」を持つ**平地式の住居***に変わった。土器の代わりには鉄鍋などが使われるようになった。こうして、遅くとも14世紀までには、竪穴住居の生活風習と土器の文化は姿を消した。

その後しばらくの北海道のようすについては、これまで不明だったことが多いが、最近は、さまざまな遺跡の調査により、後の時代のアイヌ文化がどのようなできあがってきたかということや、アイヌの人たちと周囲の人びとの接触や交流のようすがわかってきている。



図Ⅳ-2: 縄文、弥文、オホーツク文化期の北海道の主な遺跡

V. 13～17世紀の政治・社会

〈元・明とサハリン(樺太)のアイヌの人たち〉

13世紀に中国を征服したモンゴル帝国(元)は、九州に兵を送った(元寇)のと同じころ、サハリン(樺太)でもアイヌの人たちと40年間のあいだくりかえし戦った。そのころ、日本海沿岸での人や物資の交流が盛んになるなかで、アイヌの人たちが交易などを目的に北海道からサハリン(樺太)へ渡っていったと考えられている。

元がほろび明がおこるころまでに、アイヌの人たちはサハリン(樺太)に定住するようになった。そしてサハリン(樺太)のアイヌの人たちは明の国と交易をするようになった。



図V-1:アイヌの人たちは、このころ太い線のような道すじをたどっていたようだ。

〈安藤氏の内乱と鎌倉幕府の滅亡〉

同じころ、東北地方でアイヌの人たちが戦いを起こした。この戦いは、鎌倉幕府から東北地方の代官に任命されていた安藤氏の一族どうしの戦いを引き起こし、とうとう鎌倉幕府が滅びる原因の一つになった。

〈コシャマインの戦い〉

1457年、北海道の渡島半島でアイヌの指導者コシャマインが和人と戦った。この戦いのきっかけは、和人の鍛冶がアイヌの男性を殺したことだった。戦いの背景には、もともと北海道にいたアイヌの人たちと本州から渡ってきた和人とのあいだの対立があったと思われる。この戦いの結果、天ノ川と知内とを境とする、近世の和人地の原型が形作られた。その後100年間ほどのあいだ、アイヌの人たちと和人とのあいだの戦いや、アイヌの人たちを巻き込んだ和人どうしの戦いが続いた。

13世紀から15世紀のあいだ、東北地方から北海道・サハリン（樺太）にかけては、アイヌの人たちや和人を含めた交易などが活発に行われ、ときにはお互いの利益をめぐって戦いになることもあったのである。

〈松前藩の成立〉

長い間くり返し起こっていた戦いを、16世紀のなかごろに蠣崎氏が終わらせた。そして「夷狄の商舶往還の法度」により、交易による利益から取った税をアイヌの指導者たちに配分し、アイヌの人たちと和人との交易を自分の城のある松前だけでさせるよう定めた。

蠣崎氏は16世紀末に苗字を松前氏と改め、17世紀の初めに江戸幕府ができたとき、アイヌの人たちとの交易を独占する権利を認める「黒印状」と呼ばれる文書を徳川家康からもらい、松前藩をおこした。松前藩は、北海道を和人の



写真V-1:アンジェリスの蝦夷地図
17世紀初めに松前を訪れた宣教師がつくった地図

居住域である和人地とアイヌ民族の居住域である蝦夷地とに分け、そのあいだの往来を厳しく取り締まった。

このころのアイヌの人たちは、千島列島のラッコの毛皮や中国の織物などを松前に運ぶなど、広い範囲で交易をしていた。

〈シャクシャインの戦い〉

やがて松前藩は家臣たちに、蝦夷地の一定の地域でアイヌの人たちと交易をする権利を領地や米の代わりに与えるようになった(商場知行制)。すると、アイヌの人たちはいままでのような自由な交易ができなくなり、松前藩の家臣とのあいだで自分に不利な交易をさせられるようになった。そして1669年、交易品の値段を大きく下げさせられたことがきっかけになって、松前藩に対する戦いがシャクシャインに率いられて始まった。江戸幕府は東北地方の各藩に蝦夷地への出兵を命じ、ついにシャクシャインがだまし討ちにあって戦いが終わった。

この戦いのあと、松前藩はアイヌ民族に対する支配を強めていった。

VI. 13～17世紀の文化

〈擦文文化の終わり〉

擦文文化がいつごろ終わったのかにはいくつかの考えかたがある。今のところ賛成する人が多いのは、本州との交易が活発になりさまざまな品物が手に入るようになって、12～13世紀ごろに終わったとする考えである。

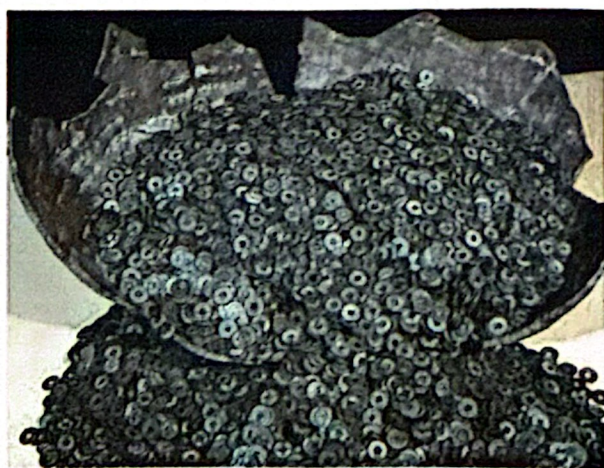
それより前に、オホーツク文化は、擦文文化に吸収されて終わってしまった。

本州からきた品物には、漆塗りの食器、鉄の鍋、桶や樽などがあつた。その代わりに本州に送られた品物だと考えられているのが、動物の毛皮、干したサケ、昆布などである。大陸との交易で得た品物を、和人との交易にまわしていたことも考えられる。なお、このような交易は擦文文化の時期にも行われていた可能性がある。

今の函館市にある遺跡からは、北海道での交易でもうけたと考えられる37万枚の貨幣が埋められているのが見つかっている。

擦文文化
15ページ参照

オホーツク文化
15ページ参照



写真Ⅵ-1: 志苔館付近で発見された37万枚の貨幣

〈14・15世紀から江戸時代まで〉

擦文文化が終わると、土器が使われなくなるので、発掘をしても暮らしのようすを示すものがあまり出てこなくなる。

文字の記録が多くなる18～19世紀ごろまでは、アイヌ文化のようすをはっきりと示すのが難しいが、どこかで一度に生活のようすが変わるのではなく、長い時間のなかで少しずつ変わっていったのだと考えられている。

この時期の文化を知る唯一の手がかりは、14世紀なかに作られた『諏訪大明神絵詞』である。そこに蝦夷としてえがかれている人たちの描写には、18～19世紀ごろのア

イヌ文化のようすと共通する部分がある。

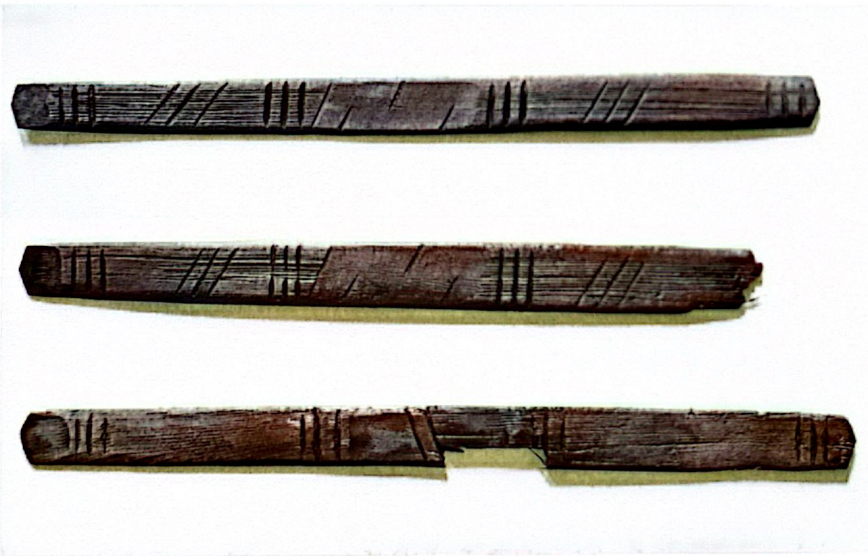
後の時代の記録にえがかれている文化がいつごろ成り立ったのかについては、さまざまな考えがある。ここではそのなかからいくつか例を出して説明する。

現代まで伝わっている英雄叙事詩は、^{えいゆうじょじ}英雄文化を営んだ人たちとオホーツク文化を営んだ人たちとの戦いをえがいたものではないかという意見もあり、そうではないという意見もある。

狩り^かで捕まえた子グマをしばらく飼^{つか}ってから、魂^{たましい}を神の国へ帰す「熊送り」は、アイヌ民族の伝統的な儀礼である。似た儀礼はオホーツク文化にはあるが、^に擦文文化には見られない。そこでアイヌ民族の熊送りをオホーツク文化に結びつける考えもある。しかし、オホーツク文化は擦文文化より早く終末^{むか}を迎えるので、アイヌ民族の熊送りはオホーツク文化とは関係がないという意見もある。

*イクパスイ

手に持ち、杯^{さかずき}の中の酒^{さけ}を先端^{せんたん}につけて神^{かみ}に捧^{たもた}げる祭具。



写真Ⅵ—2: 上ノ国町・勝山館付近で出土した儀式の道具

また最近の発掘^{はっくつ}で、アイヌ民族がお酒を神^{かみ}に捧^{たもた}げるときに使うイクパスイ*と呼ばれる祭具と同様のものが、16世紀末から17世紀初めごろに使われていたことがわかった。16世紀末の事件について記録した文献^{ぶんけん}にも同様の祭具についての

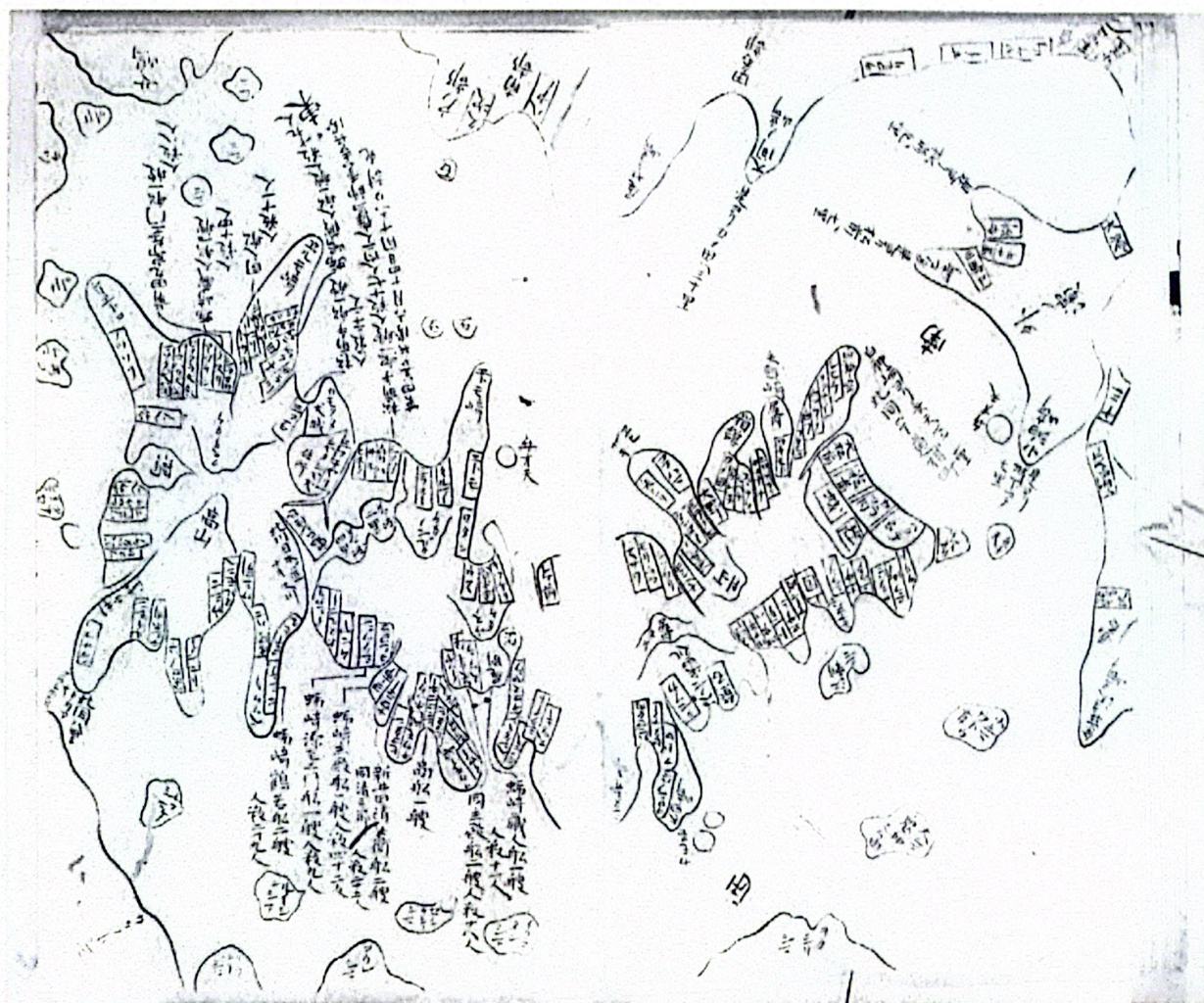
記録がある。

17世紀なかごろに船で北海道^{ほっかいどう}にやってきたオランダ人の記録のなかに、アイヌの人たちがとりでや柵^{さく}囲いのようなものを建てていることが書かれている。そうしたとりでのことは、18世紀以後の和人による記録などにも現れる。

VII. 17～19世紀の政治・社会

〈シャクシャインの戦いから18世紀なかごろまで〉

17世紀のアイヌ社会には、大小さまざまな指導者たちがいた。シャクシャインはそうした指導者の一人である。この指導者たちは和人との交易を指揮してたくさんの財産を持ち、政治的にも力を持っていた。たとえば、石狩川流域すべてを勢力範囲とした指導者ハウカセは、数多くの鉄砲やさまざまな外来の宝物や衣装などを持っていたとされる。



写真Ⅶ-1: シャクシャインの戦いについて書かれた文書にのっている地図

シャクシャインの戦いのあと、和人に都合のいいように交易が進められるようになり、交易の品物の値段もむりやり下げられた。それでもアイヌの人たちは交易をやめなかった。長いあいだ続けてきた和人との交易はアイヌの人たちにとってどうしても必要なものになっていたのである。

18世紀には、和人の商人がアイヌの人たちとの交易を引き受け、もうけたお金の一部を松前藩やその家臣に納めるようになった。こうしたしくみを場所請負制という。そしてだんだんと、商人たちはアイヌの人たちを働かせて漁業をし、もうけを大きくしようとするようになった。

それでも18世紀の前半までは、オホーツク海沿岸やサハリン（樺太）、国後など、松前藩や商人があまり活動していない地域があった。そうした地域のアイヌの人たちは、自ら他の地域へ出かけていって交易を行っていた。

〈18世紀の後半〉

18世紀のなかごろには、和人の活動がサハリン（樺太）や千島にも及んだ。しかし、アイヌの指導者たちは強い力をまだ持っていた。とくに蝦夷地の東端には、松前藩やロシアの勢力の及ばない地域が存在していた。国後島の指導者ツキノエは、和人の商人との交易を何年ものあいだ断りつづけ、その後ようやく始めることにした。松前藩にも「蝦夷地での争いごとの解決はアイヌの人たちにまかせる」という決まりがあった。

だんだん松前藩や家臣たちは商人にたくさんのお金を求めるようになった。そして商人たちはアイヌの人たちを無理に働かせてもうけようとした。アイヌの人たちをおどしたり殴りつけたり、妻を奪ったりする和人もいた。

1789年に、国後島とその対岸の北海道でアイヌの人たちが立ち上がり、ひどい振る舞いをしていた和人たちを殺した。「クナシリ・メナシの戦い」である。

しかし、ツキノエたちは和人との交易をやめることがで

きなくなっていた。そして立ち上がったアイヌの人たちを説得して、松前藩と話し合いをしようとした。ところが松前藩は、すぐさま戦いの指導者たちの首を切って殺してしまった。



西蝦夷地、奥の山、モロヘ、首長
コタンビル肖像

写真Ⅶ-2:18世紀後半頃の留萌の指導者コタンビル

〈クナシリ・メナシの戦いの後〉

戦いの後、蝦夷地の太平洋側は幕府の直轄地にされた。幕府は、アイヌの人たちと直接交易をしようとしたり、和人風の暮らしぶりを押しつけようとした。しかしうまくいかず、結局商人に頼ることになった。

その後いったん蝦夷地の太平洋側は松前藩に返された。やがて幕末に外国からの圧力が高まるなかで、幕府は蝦夷地全体を直轄とした。しかし政治の実態は変わらなかった。厳しい労働や病気などでアイヌ民族の人口は減り、家族や村がばらばらにさせられることもあった。

それでもアイヌの人たちが仲間や自分たちの暮らしを守ろうとしているようすが、江戸時代の終わりごろに松浦武四郎という人が書いた記録のなかにえがかれている。

〈明治維新のころ〉

明治維新のあと数年してから、アイヌの人たちを強制的に働かせるのをやめさせるような政策がとられたり、アイヌの人たちが自分で漁業を始めることのできるような制度が作られたりするようになった。

しかしそうした政策は、アイヌ民族の地位を高くするためではなく、和人に同化させるためのものだった。

VIII. 17～19世紀の文化

〈『オムシャ図』に見るアイヌ文化〉

これらの図は、19世紀のなかごろ、明治維新の少し前に描かれた『オムシャ図』という絵の一部分である。

オムシャとは、もともとアイヌの人たちと和人との交易のときの儀礼^{ぎれい}だったと考えられている。しかし和人は、そういう儀礼を利用して、アイヌ民族への支配を強めていった。そしてこの絵が描かれた時代には、和人がアイヌ民族を押さえつけて支配していることを示す儀礼になった。

この絵に描かれている儀式^{ぎしき}には近くの村々からアイヌの人たちが集められている。和人の武士や商人は、アイヌの人たちを漁業の仕事場の近くに集めて働かせ、そこで指導者を任命するようになった。その指導者たちが土下座で挨拶^{あいさつ}させられている。土下座は、アイヌ文化にはない挨拶のしかたである。



写真Ⅷ—1:オムシャ図（部分図）

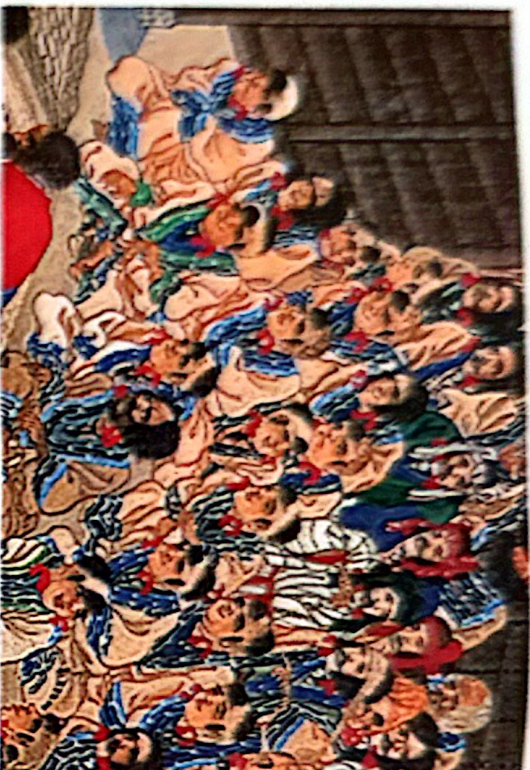
漆塗りの容器のなかには酒が入っている。その上に乗っているのはたばこである。

これらは和人からアイヌの人たちに渡される品物である。酒は儀式での神への捧げものであった。しかし和人は、酒を悪用して、戦いのあとの話し合いのときにアイヌの人たちに酒を飲ませてだまし討ちにしたこともあった。

交易の関係が対等だったころは、漆の入れ物の多くは作りのみごとなものだった。それを多く持っていることは和人との信頼関係を示し、富の象徴でもあった。しかし商人たちが蝦夷地^{えぞち}での商売を引き受けるようになるとやがて、

蝦夷地

19, 20ページ参照



写真Ⅷ—2:オムシヤ図 (部分図)

質の悪い品物がアイヌの人たちに渡されるようになった。

さまざまな材料で作った着物も描かれている。背、そで、すそ、えりには模様がししゅうされている。オヒョウの木の内皮をせんにして織った着物も見える。和人から手に入れた木綿で作った着物もある。

子どもたちは前髪と耳のところの髪を残してあとは剃りあげている。女の人は「おかつぱ」のような髪型に描かれている。

銀などで作った耳輪をしている人がいる。女の人のロや手には入れ墨がある。ガラス製の青玉などの首飾りや鉢巻きをしている女性もいる。

〈家と暮らし〉

家のなかには一つの大きな部屋で、まん中にいろりがあった。いろりの火は神として敬われ、その周囲で人々が座る席順などには厳しい決まりがあった。家のまわりには祭壇のほか倉、子グアの檻、便所などを建てた。

このころのアイヌ民族は、狩猟・漁労・採集に補助的な農業を営んでいたとしばしば言われる。しかし、交易にも重要な意味があった。やがては商人のもとで働かされるようにもなってしまった。

狩りの獲物はクマやシカのほかさまざまな動物だった。弓や仕掛け弓*で捕ることもあり、冬眠中の巣穴を襲ったりおおぜいで追いつめて狩ることもした。

魚は、川をせき止めたり、突いたり、釣ったり、網でと

*仕掛け弓

動物がとおると矢がひとりでに弓から発射されるしくみのわな。

ったりした。サケをはじめ、マス、シシャモなどさまざまな魚をとった。

アワやヒエなど穀物の栽培も古くから行っていた。また、食料・薬・手工芸品の材料などにするため、野草や山菜を採取していた。

〈物語〉

アイヌ語の物語にはさまざまな種類がある。動物や植物などの神々が登場する物語（地域によって、カムイユカラ、オйнаなどと呼ばれる）や、超人的な英雄が敵と戦う物語（地域によって、ユカラ、サコロペ、ハウキなどと呼ばれる）や、普通の人間が登場する物語（地域によって、ウエペケレ、トゥイタッなどと呼ばれる）がある。これらの物語は口で語り、それを聞いて楽しむものだった。

Ⅸ. 明治・大正から戦前までの政治・社会

〈アイヌ民族の日本への統合と開拓〉

1869（明治2）年、政府は蝦夷地を北海道と呼び改め、一方的に日本の一部とした。そしてアイヌ民族の戸籍を作成して日本の国民だとした。だがアイヌ民族を「旧土人」と呼び、和人とは差別し続けた。

同じ年、北海道を治めるために置かれた官庁である開拓使は、アイヌ民族の言語や生活習慣を和風化し、和人に同化する政策をとったが、これは、まだあまり広がらなかった。

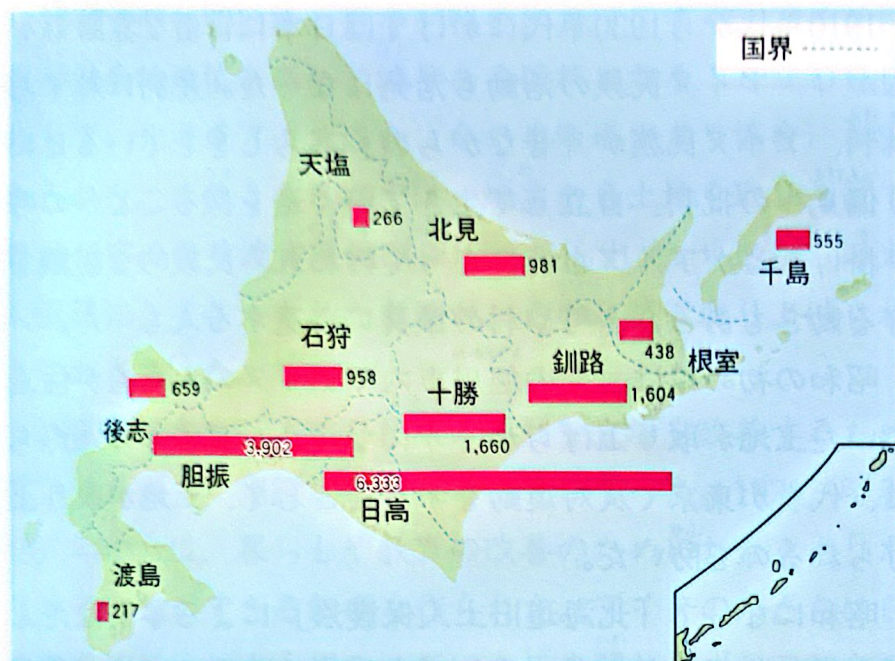
開拓使は、アイヌの人たちが利用してきた土地を取り上げて国の財産だとしたうえで、民間に売り払うことにした。またサケ漁やシカ猟を北海道の産業にするために、アイヌの人たちが行ってきた川での漁を禁止したり、シカ猟を禁止したりした。

こうした開拓優先の政策の結果、アイヌの人たちは食べるものに困るようになった。農業を教える事業が行われたりもしたが、急に暮らしのしかたを変えるのは多くの場合難しいことであった。そしてアイヌの人たちは財産を管理する能力がないと決めつけられ、土地の所有権が認められなかった。

日本政府は、1875（明治8）年にロシアとのあいだでサハリン（樺太）や千島列島の国境についての条約を結ぶと、サハリン（樺太）や千島に住んでいたアイヌの人たちをむりやり北海道や色丹島に移住させた。そして、移り住んだ人たちは急な生活の変化や病気の流行などに苦しみ、多くの人が亡くなった。

〈開拓の本格化と「北海道旧土人保護法」〉

1886（明治19）年には北海道庁が置かれた。道庁は土地の民間への引き渡しと開拓をさらに進め、アイヌの人たちの住む場所を狭めていった。



図区—1:アイヌ民族の人口分布 1898（明治31）年

こうした政策のなかでアイヌの人たちが暮らしに困るようになると、1899（明治32）年に「北海道旧土人保護法」が作られた。この法律は、農業のための土地を与え日本語や和人風の習慣による教育を行うことで、アイヌ民族を和人に同化するためのものだった。

土地を与えられたアイヌの人のなかには農業経営に成功した人もいたが、農地にすることに失敗して土地を取り上げられたり、はじめから農業に向かない土地を与えられた人もいた。また与えられた土地は、和人に与えられた土地に比べはるかに狭いものだった。

学校の建設にあたっては、子どもに教育を受けさせようと、土地や資金を寄付するアイヌの人もいた。しかし学校では日本語や和人風の生活のしかたを覚えなければならなかった。また北海道旧土人保護法による教育の重要な特徴

は、和人児童との別学^{べつがく}を原則とし、教育内容にも格差^{かくさ}を設けていたことだった。

〈大正時代から戦争中の時代〉

1910年代から1930年代にかけては日本に自由な雰囲気^{ふんいき}が広がり、アイヌ民族の活動も活発になった。差別に対する批判^{ひはん}、アイヌ民族が「昔ながらの」暮らしをしているという偏見^{へんけん}への批判、自立して生きていく道^{みち}を探ることへの呼び掛け^{よびかけ}などがアイヌ自身によって行われ、民族的な組織を作る動きもあった。町や村の議員に当選する人もいた。

昭和の初めには、今の旭川^{あさひかわ}市内でアイヌの人たちが住んでいた土地が取り上げられそうになった。アイヌの人たちは、代表が東京で反対運動をするなどして、土地が取り上げられるのを防^{ふせ}いだ。

昭和になって「北海道旧土人保護法」による事業はだんだん行われなくなった。それでも、アイヌ民族は社会のなかで不利な立場に置かれ、差別されていた。

戦争のときには、アイヌの人も和人と区別なく兵隊に取られ、戦場に行った。

X. 現代の政治・社会

〈国内の政治の動き〉

1945（昭和20）年、日本が戦争に負けてすぐ、アイヌ民族が社会的地位を高めて誇りある民族となることなどを目指して、北海道アイヌ協会（今の北海道ウタリ協会）が設立された。そのころ日本では、地主から土地を取り上げて農民に安く売り渡す農地改革が進められた。「北海道旧土人保護法」で与えられた土地が、この政策で取り上げられることもあった。

1960年代から、アイヌ民族の不利な立場を改善するために、さまざまな施設が作られるようになった。1974（昭和49）年からは、暮らしや教育の改善のためにお金を借りたりすることができる制度も作られた。アイヌの人たちは日本の各地に住むようになっていたにも関わらず、これらの制度は北海道だけで実施された。失われかけていた昔の文化などを取り戻す活動も始まった。

1984（昭和59）年に北海道ウタリ協会は、アイヌ民族の基本的人権を回復し差別をなくすこと、生活水準や教育の改善、アイヌ文化の伝承、アイヌ民族やアイヌ文化についての政治にアイヌ民族の意見を取り入れること、などを求めた「アイヌ新法」案を作った。そしてこの「アイヌ新法」の制定を北海道や政府・国会などに働きかけていった。とくに、1986（昭和61）年に当時の中曽根康弘総理大臣が「日本は単一民族国家」「日本国籍を持つ方々で、差別を受けている少数民族はいない」などと発言したあと、アイヌ民族の運動はより活発になり、「先住民族の権利」についての国際的な論議のなかに位置づくようになった。

この運動に対して、1997（平成9）年、国会は「北海道旧土人保護法」を廃止し、新しい法律*を作った。北海道ウタリ協会の「アイヌ新法」案のなかの「アイヌ文化」の



北海道旧土人保護法
31ページ参照

*新しい法律

正式名称は、「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」と言う。

一部分だけを法律にしたものである。

〈国内の社会の動き〉

さまざまな制度が作られても、アイヌ民族は社会のなかで不利な立場に置かれ続けた。差別もまだなくなっていない。こうした不利なところや差別などはこれからなくしていかなければならない。

〈国際政治とアイヌ民族〉

ここで「民族」という言葉の意味を考えてみよう。たとえば「アイヌ民族」とは、血がつながっていたり同じような言語や生活習慣などの文化を持っていたりする人たちで、「自分たちはアイヌ民族だ」と考えている人たちのことだと言われている。一つの国のなかには、一つの民族だけが住んでいるのではない。日本国民だからといって同じ民族であるとは限らない。

アイヌ民族は、自分たちの土地に古くから暮らしていな



がら、今日本のなかで不利な立場に置かれている。国連（^{こくれん}国際連合）などではこうした民族のことを（^{せんじゅうみんぞく}先住民族）と呼んでいる。

写真X—1:1992年12月10日 国連「世界の先住民の国際年」開幕式典。

当時の北海道ウタリ協会
理事長^{のむらさき}野村義一氏の記念
演説。

現在国連では、さまざまな国のなかの先住民族が失った権利をどうやって取り戻すか、話し合いが進められている。1993（平成5）年には、アイヌ民族を含む世界の先住民族の参加を得た会議で「先住民族の権利に関する国連宣言」の草案が決議された。アイヌ民族と日本政府も、この話し合いに参加している。

XI. 近代・現代の文化

ここでは、近代・現代のアイヌ民族の歴史と文化を考える素材として、何人かのアイヌの人たちの生き方を紹介することにした。

彼らはその地域や職業の中で指導的な役割をはたしていたが、決して特別な存在ではなく、この時代の多くのアイヌの人たちと共通する生活環境の中を生きてきた。もちろんこの他にも、農林業、会社員など、アイヌの人たちには多様な職業と日常生活があり、これら多くの人々がみな、近代・現代のアイヌ文化の担い手なのである。

大川原コビサントク

大川原コビサントクは、1874（明治7）年、^{むかわら}鵠川町に生まれた。父も教育熱心な人として知られ、自宅に和人の教師を招いてアイヌの子どもたちのための私塾を開いた。

コビサントクは100頭もの馬を飼い、広大な土地を所有するようになった。水田も増え続けたが、戦後、^{のうちかい}農地改革のために多くの土地の所有権が失われてしまった。村会議員としても35年間^{もんせい}鵠川の村政に関わり、米がとれなかった年には村人のために食料を買い集めたりした。毎朝四時に馬に乗って、村人に早起きを呼びかけて歩いたというエピソードも残っている。彼の協力なしには、^{とまこまい}鵠川や苦小牧での事業がおこせなかったとさえいわれる。

コビサントクは1951（昭和26）年に亡くなったが、^{こうせき}鵠川町内の神社には今でもコビサントクの功績をたたえる石碑が立っている。

山本多助

山本多助は、1904（明治37）年、釧路市で生まれた。小学校ではアイヌ語を使うと怒られたので、学校では日本語、家ではアイヌ語、と二つの言葉を使い分けて育った。

1934（昭和9）年に阿寒が国立公園に指定されたころから、木彫りの制作と販売を開始した。彼の彫った木彫りのクマは

飛ぶように売れたが、戦争になり南洋群島へ配置された。食糧難で多くの仲間を失い、多助も栄養失調で数ヶ月も寝込んだ。健康をとりもどした多助は、すぐにアイヌ民族の権利回復のための運動に取り組んだ。その後も、伝統的な踊りを伝承するための会を作ったり、阿寒湖のマリモ祭りを発展させたりした。アイヌの勇者の物語劇「アイヌラックル伝」をフランスのパリで公演したときは、絶賛を浴びた。多助は、88歳で亡くなるまでに、アイヌ文化を伝えるために多くの本を書き残している。



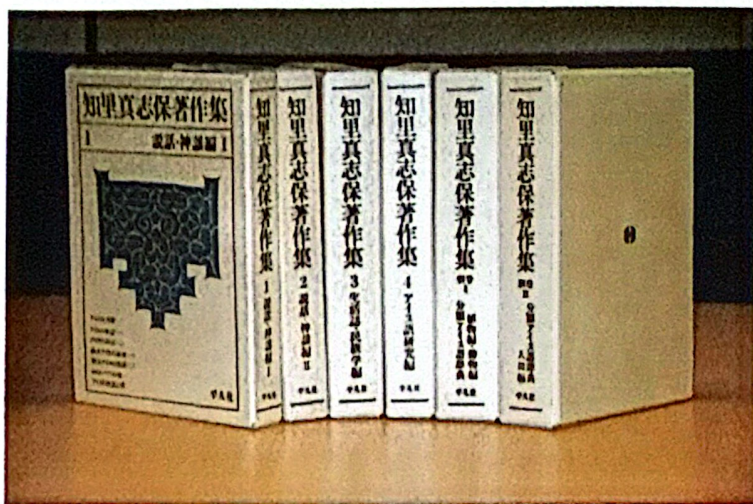
写真Ⅺ-1: 山本多助さん

1936（昭和11）年頃の山本多助さんのご家族。左端が山本多助さん。

知里真志保

知里真志保は、1909（明治42）年、今の登別市に生まれた。『アイヌ神謡集』で有名な知里幸恵は、彼の姉にあたる。真志保は、室蘭中学を卒業してから東京に出て、第一高等学校に入学した。彼の語学の才能にはだれもが目をみはり、英語やドイツ語ではいつもトップの成績をおさめていた。

東京帝国大学（今の東京大学）に入学してから、本格的にアイヌ語の研究を開始し、数々の論文を発表した。東大



写真Ⅺ-2: 知里真志保著作集 全6巻

を卒業するときには、多くの新聞がアイヌ出身の初の東大卒業生ともてはやしたが、彼自身はそのような取り上げられ方を嫌ったという。

真志保は「朝日文化賞」を受賞した『分類アイヌ語辞典』をはじめ、様々な著作物を出版し、アイヌ語研究において決定的に重要な役割を果たした。1958（昭和33）年に

北海道大学の教授になったが、学問的な蓄積の多くを發表できないまま、1961（昭和36）年、52歳でその生涯を閉じた。

山丸武雄

山丸武雄は、1914（大正3）年、白老町で生まれた。白老町のアイヌの人たちの多くがそうであるように、山丸家もまた漁業を家業としていた。13歳になると、夏の間は父とともに大型船に乗り、カムチャッカへ鮭漁に出た。やがて白老漁業組合長にもなり、地域の漁業の発展に尽くした。33歳からの40年間は、村会議員としても活躍した。

また、年間何十万人にもものぼる白老町への観光客を受け入れるため、昔から伝わる草ぶきの家々を湖のそばにたて、ポロトコタンと名付けた。当初の運営は厳しく、「観光」に対する周囲の冷たい視線もあったが、武雄は一貫して「文化を伝える」ことの重要性を訴えた。1984（昭和59）年には、念願の「アイヌ民族博物館」を建設し、1994（平成6）年、80歳で亡くなった。

平 三雄

平 三雄は、1928（昭和3）年、室蘭市で生まれた。曾祖父は地域の指導者として知られ、地域の小学校の前身となる寺子屋式の塾を開いていた。

代々漁業を行ってきたが、昭和の初期にはまだアイヌの漁法が残っており、勇ましいカジキマグロ漁も行っていたという。小学校を卒業したのは、戦争が激しくなった頃で、船で石炭を運ぶ仕事をした。戦後は、父親とともに漁業を行い、ニシンやカレイ、ツブを捕った。やがてホタテ貝の養殖を始め、自分の船も持ち、生活は安定した。

父親は、正式なカムイノミ（神への祈り）を行った人であり、三雄も小さいころからアイヌ風の葬式の手伝いをしたりして育った。三雄は、代々室蘭の地で暮らしてきた人間として、先祖の風習を学びながら、若い世代に伝えていきたいと語っていたが、2001（平成13）年、73歳で亡くなった。



写真Ⅺ-3:平 三雄さん
平さんがツブかご漁をしている様子。

XII. アイヌ語

〈アイヌ語とは〉

アイヌ語は、現在日本と呼ばれている地域でむかしから使われてきた。しかし下の例のように、アイヌ語と日本語とは大きく違う言葉である。

顔—ナン	目—シク	耳—キサラ	鼻—エトウ
手—テク	指—アシケペツ	胸—ペンラム	腹—ホン

〈アイヌ語の話されていた地域、 話されている地域〉

アイヌ語はかつて北海道全域、サハリン（樺太）南部、千島列島、および本州の一部で話されていた。本州のアイヌ語については詳しいことはわかっていない。津軽半島の北端では江戸時代になってもアイヌ語が日常的に使われていたことが当時の記録からわかっている。

千島列島の北のほうに住んでいたアイヌの人たちは、明治時代にむりやり南のほうに移住させられた。サハリン（樺太）のアイヌ語の話し手も、日本が戦争に負けたときに多くは北海道に移ってきた。

以前は北海道全域でアイヌ語が話されていたが、今アイヌ語をなめらかに話せる人の数はとても少なくなったと考えられる。

千島列島のアイヌ
の人たち
30ページ参照

〈アイヌ語地名〉

北海道の地名の多くはアイヌ語でつけられたものである。東北地方の北部にもアイヌ語地名がたくさんある。アイヌ語の地名の成り立ちの説明は多くの人によって行われているが、正しいものはごくわずかである。

📖 東北地方の
アイヌ語地名
13ページの図Ⅲ
—1参照

〈アイヌ語はどんな言葉か〉

アイヌ語には現在のところ、標準語・共通語にあたるものがない。しかしアイヌ語の方言差は日本語に比べれば小さく、少なくとも北海道の諸方言のあいだでは、発音にも文法にも根本的な違いはない。

アイヌ自身がアイヌ語を文字で書くことは大正時代ごろから行われてきた。今はカタカナやローマ字で書くのが一般的^{いは}になっている。

アイヌ語は日本語の話し手にとってはわりあい発音しやすい言葉である。ただ、アイヌ語としては別な発音なのに日本語の話し手には同じように聞こえ、聞き分けるのが難しい音もある。

アイヌ語で言葉を並べる順序は日本語と比較的^{ひかくてき}よく似ている。しかし、ひとつひとつの言葉の組み立てかたなどは、日本語と大きく違っている。

〈アイヌ語の過去と現在〉

現在、なめらかにアイヌ語を話せる人の数はとても少ないと考えられている。

それは、明治時代から今までアイヌ民族に対する同化政策が行われ、学校では日本語を教えられ、アイヌ語を話せる社会が崩壊して、日本語を使わないと暮らしていけないようになったからである。アイヌ語が力を取り戻すためには、アイヌ民族の社会的・経済的地位を向上させることが大切である。法律や学校でアイヌ語を奨励すればそれで済むというものではない。

〈アイヌ語を守るための動き〉

アイヌ語を後の時代に伝えようとする人は、大正時代ごろからいた。その原点とも言えるのは、知里幸恵の『アイヌ神謡集』であろう。そして1987（昭和62）年から北海道ウタリ協会がアイヌ語教室を開き、教科書も作られた。

1997（平成9）年に作られた法律でも、アイヌ語についての事業を行うことになった。これらの事業が、アイヌ語を発展させようとするアイヌ民族の活動とどう結びつくかがこれからの課題である。

1997(平成9)年の
法律
33ページ参照

XIII. 北海道のヒト—骨の特徴から考える—

日本列島のヒトの歴史を考えるときには、昔からアイヌの人たちが注目されてきた。

アイヌの人たちの骨格は次のような特徴を持っている。

頭が長く、眉の骨が張り出している。顔の骨は横幅が大きく、顔の高さはやや低い。鼻の付け根が深くへこみ鼻は高い。手足の先の部分が長い。つまり足はひざから下が長く、腕はひじから先が長い。

はっかいどう
北海道内で発見された人骨の特徴を、古い順に見ていこう。

- 1 土器を使い始める前の時代の人の骨は、まだ発見されていない。
- 2 縄文時代の、特に北海道の北部と東部の人の骨は、後の時代のアイヌの人たちの骨の特徴によく似ている。けれども北海道ではまだ、縄文時代の人の骨はそれほど多く発見されていない。
- 3 続縄文時代の人の骨は、北海道の南部でも、後の時代のアイヌの人たちに近づいてくる。
- 4 擦文時代の人の骨は、ほんの少ししか見つからないが、後の時代のアイヌの人たちと共通の特徴がある。
- 5 オホーツク文化人がどこからやってきたのかについては、まだよくわかっていない。彼らは大きく平べったい顔で、肘から先や膝の下が短いという特徴を持っている。これは、北海道のアイヌ民族とは正反対の特徴だといえる。

このことから、昔、北海道やサハリン（樺太^{からふと}）にはアイヌ民族とは違う人たちも住んでいたことがわかる。最近の研究では、オホーツク文化人は、大陸のアムール川流域からサハリン（樺太）にかけて住んでいる人々に近いといわれている。

- 6 オホーツク文化の時代や縄文時代^{さつもん}が終わってからの時代を生きていた人々は、ますます後の時代のアイヌの人たちと同じような特徴を持つようになった。江戸時代に入ると、アイヌ民族の骨格資料がたくさんそろっている。

このように、北海道の縄文時代人^{じょうもんじだいじん}は、すでにアイヌ民族に通じる特徴を持っていることがわかる。けれども、縄文時代のサハリン（樺太^{からふと}）や千島^{ちしま}に、縄文時代人と同じ系統の人々がいたかどうかは、よくわかっていない。

しばらく前まで、アイヌの人たちは「ヨーロッパ人」の仲間だと見られることが多かった。しかし、ここ数十年の調査研究により、「アジア人」の仲間であることがわかってきた。そして、日本列島の縄文時代人の一部が、アイヌ民族の祖先だといわれるようになった。

では、その縄文時代人の祖先はどこからやってきたのだろうか。最近の遺伝子^{いでんし}の研究では、北東アジアだという説が有力になってきているが、別の研究では東南アジアだという説もあり、まだはっきりしたことはわからない。

今後、研究が進んでいくためには、古人骨の発見や遺伝学的な調査に対するアイヌ民族自身の理解と協力が必要である。北海道のヒトの歴史は、本州、サハリン（樺太）、さらには千島の人類史とあわせて、今後さらに解明していかなければならない。

●本書作成にあたって参考にした資料

図Ⅰ—1：細石刃／鶴丸俊明氏提供の図版「細石刃の利用」（1998
「先史時代のたんの」『新端野町史』）より作図

図Ⅰ—2：約2万年前の日本列島／鶴丸俊明氏提供の図版 「日
本列島の約2万年前」（湊正雄文献より）を参考

図Ⅱ—1：土器の形にあらわれる道南と道東の違い／鶴丸俊明氏
提供の図版「北海道東西の土器」より作図

写真Ⅱ—1：土器につけられた動物のかたち／北海道立埋蔵文化
財センター蔵

図Ⅲ—1：東北3県（青森県、秋田県、岩手県）にあるアイヌ語
地名／（角川書店『新版 古代の日本⑨ 東北・北海
道』1992より作図、原図は『アイヌ語地名の研究』
1, 1982. 山田秀三より吉田欽氏作図）

図Ⅳ—1：擦文文化とオホーツク文化の住居／北海道開拓記念館
提供の図版より作図

図Ⅳ—2：続縄文、擦文、オホーツク文化期の北海道の主な遺跡
／菊池徹夫氏提供の図版より作図

図Ⅴ—1：アイヌの人たちは、このころ太い線のような道すじを
たどっていたようだ。／中村和之氏提供の図版「13～
16世紀の環日本海地域とアイヌ」（大隅和雄・村井章
介編『中世後期における東アジアの国際関係』山川出
版社所収、1997年）より作図

写真Ⅴ—1：アンジェリスの蝦夷地図

写真Ⅵ—1：^{しのりたて}志苔館付近で発見された37万枚の貨幣／市立函館博
物館蔵

写真Ⅵ-2：上ノ国町・勝山館^{かみくに かつやまたて}付近で出土した儀式の道具／上ノ国町教育委員会蔵

写真Ⅶ-1：シャクシャインの戦いについて書かれた文書にのっている地図／東京国立博物館蔵「津軽一統志」より

写真Ⅶ-2：18世紀後半頃の留萌の指導者コタンビル／天理大学附属天理図書館蔵 福士廣志編著「留萌いまむかし」より

写真Ⅷ-1：オムシャ図（部分図）／国立スコットランド博物館蔵

写真Ⅷ-2：オムシャ図（部分図）／国立スコットランド博物館蔵

図Ⅸ-1：アイヌ民族の人口分布1898（明治31）年／山田伸一氏提供（北海道編『新北海道史』第9巻、1982年より作成）

写真Ⅹ-1：国連「世界の先住民の国際年」開幕式典／写真提供 UN-DPI

写真Ⅺ-1：山本多助さん／写真提供 チカッブ美恵子氏

写真Ⅺ-2：知里真志保著作集全6巻

写真Ⅺ-3：平 三雄さん／写真提供 平 三雄氏

平成12年 編集委員

委員長 奥田 統己

委員 阿部 一司

澤井 政敏

スチュアート ヘンリ

チカupp 美恵子

本田 優子

横山 むつみ

アイヌ民族：歴史と現在

－未来を共に生きるために－

発行年月	2001年 3 月	第一刷	2006年 2 月	第六刷
	2002年 1 月	第二刷	2007年 2 月	第七刷
	2003年 2 月	第三刷		
	2004年 2 月	第四刷		
	2005年 2 月	第五刷		

発行 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001

北海道札幌市中央区北1条西7丁目プレスト1・7(7階)

TEL (011) 271-4171 FAX (011) 271-4181

URL <http://www.frpac.or.jp/> E-mail: ainu@frpac.or.jp



学校名	氏名
-----	----